原始仏教経典主要韻文中[1]における「病」と「苦」
——dukkha は希望の徴（しるし）か？——

橋 本　哲 夫

（和文要旨）

わたしたちの常識では、「病」は「苦」である。しかし、パーリ語経典の主要な韻文中では、「病」は「苦」であるとする用例は、極めて珍しい。わずかに、vyādhi、 roga、dukkhita（激しい苦悩）を使った例を見るのみである。メカニズムはこうである——vyādhi は「意味づけられやすい病」（stigma とされやすい病）である。roga は、バラモンによって punishment であると「意味づけられた病」である。vyādhi を患っている人が、その vyādhi を roga だと断定されると、その患者は、punishment を受けているのだと考え、dukkhita（激しい苦悩）を受ける。roga は、dukkhita を生産するシステムである。一方、dukkha もよく似た働きを持つシステムであるが、生産されるものが異なっている。dukkha は、「四聖諦」に見られるように、dukkha と断定したものの消滅をもたらすシステムである。それが「病」である場合、「かならず治る」ということである。dukkha は、「希望の徴（しるし）」である。

(SUMMARY)

In our ordinary lives ‘sickness’, ‘illness’ and ‘disease’ are the causes of ‘pain’ or ‘misery’ , but in the major verses of the Buddhist Canon, ‘sickness’, ‘illness’ and ‘disease’ are seldom said to be the causes of ‘pain’ , ‘misery’ or ‘being painful’. *Vyādhi* as a disease is rarely said to be the cause of *dukkhita* (being painful). The mechanism is this: *Vyādhi* is a disease which is easily ‘stigmatized’. *Roga* is a punishment from Brahmans. Punishments make persons painful. When *vyādhi* is said or thought to be one of the *roga*, i.e., punishment, it is understood that *vyādhi* makes persons painful, that is, *vyādhi* becomes the cause of *dukkhita*. In short, *roga* is the system which makes *vyādhi* the cause of ‘being painful’.

In the field of medicine, the meaning of *dukkhita* is not the same as that of *dukkha*. *Dukkha* has many similarities with *roga*. The most important similarity is that *dukkha* is a system as well as a *roga*. It makes *vyādhi* into something that causes ‘not being painful’, that is, it marks the ‘end of *roga*’.

When *vyādhi* is said to be one of the *roga*, it means that it causes ‘being painful’.

Otherwise, when *vyādhi* is said to be one of the *dukkha*, it means that it causes the ‘end of *dukkhita*’ or the ‘end of *roga*’.

Dukkha is a token of hope in the field of medicine.

初めに

「四聖諦」は、もっとも重要な仏陀の教えの一つであり、そのテーマは、「苦」の消滅である。また、私たちの日常の感覚では、「病」は「苦」である。したがって、「苦」の消滅が言われる場合、「病」の消滅が問題となっているはずであり、仏陀は、病を癒す医師でもあるはずである。事実、仏陀は、弟子のひとりによって、医師（tikicchaka）とされる[2]。

「わが師は、すべてを知る人、すべてを見る人、勝利者、大いなる慈悲ある師、全世界の人々を癒す医師である。sabbaññû sabbadassâvî jino âcariyo mama mahâkâruṇiko satthā sabbalokatikicchako.　（Thag.722）

さらに、仏陀は、自身を外科医に譬えてもいる。

汝等がこの道を行くなら、苦しみをなくすことが出来るであろう。（刺が肉に刺さったので、）矢を抜いて癒す方法を知って私は、汝等にこの道を説いたのだ。etaṃ hi tumhe paṭipannā dukkhass’antaṃ karissatha, akkhāto ve mayā maggo aññāya sallasanthanaṃ.　（Dhp.275）

しかし、一方で、仏陀は、医術(tikiccha)を禁止する[3]。

わが徒は、アタルヴァ・ヴェーダの呪法と夢占いと相の占いと星占いとを行なってはならない。鳥獣の声を占ったり、懐妊術や医術(tikiccha)を行なったりしてはならぬ。āthabbaṇaṃ supinaṃ lakkhaṇaṃ no vidahe atho pi nakkhattaṃ, virutañ ca gabbhakaraṇaṃ tikicchaṃ māmako na seveyya. (Sn.927)

仏陀は、医療行為にたいして相反する態度を同時に示していたようである。彼は、医療行為を是認したのであろうか、それとも否認したのであろうか？[4]　そのことは、「病」と「苦（苦痛）」との関係に帰着する。もし、「病」がかならず「苦（苦痛）」をもたらすのであれば、「病」を治さなければ、「苦（苦痛）」を除くこ

とはできない。すなわち、医療行為は、絶対的に是認されねばならない。しかし、もし、「病」がかならずしも「苦（苦痛）」をもたらすのでないばあい、「病」を治すことで、「苦（苦痛）」がなくなるとは限らない。すなわち、医療行為は、「苦（苦痛）」の消滅にとって絶対的なものではない。それでは、原始仏教経典主要韻文中に現れる「病」はかならず「苦（苦痛）」をもたらすのだろうか？さらに、もし「病」がかならず「苦（苦痛）」をもたらすとは限らない場合、「病」と dukkha（通常「苦」と訳される）の関係は、どのように理解されるべきなのだろうか？

1. 「病」と「苦（苦痛）」

原始仏教経典主要韻文中（約 11,700 個）において、一般的「病[5]」を意味する語には、akalla, ātaṃka, ātura, ābādha, āmaya, īti, gilāna, roga, vyādhi　があり、病名としては、 kuṭṭha（皮膚病あるいはハンセン病）、 vātaroga（リュウマチ）、cittakkhepa（精神病）、 kāsa（喘息）、 sāsa（喘息）、paṇḍuroga（黄疸）がある。

一方、「好ましく愛すべく心にかなうものが滅びる場合」などが、「苦（苦しむ）」（dukkha、dukkhita[6]）であるとされる[7]。この場合、わたしたちの常識と異なるところはない。したがって、「病」も「苦（苦しむ）」（dukkha、dukkhita）であるはずである。しかし、原始仏教経典主要韻文においては、vyādhi[8]が使われる３例を除いて、「病」が「苦（苦しむ）」（dukkha、dukkhita）であるとされる用例はない[9]。３例は以下のとおりである――

a. そのように、煩悩という病気に苦しみ悩む人が、かの教師のもとへ行こうとしないのは、教師の欠点ではない。evaṃ kilesavyādhīhi dukkhito patipīḷito na gavesati taṃ ācariyaṃ na so doso vināyake.（J.vol.1,p.5）

b. わたしは vyādhi[10]を患い、それが、roga であることによって[11]激しく苦しめられ、悩まされている。＜以下略＞（著者訳） puṭṭhassa me aññatarena vyādhinā rogena bāḷhaṃ dukkhitassa ruppato,...（J.vol.2,p.437）

c. おまえ、おまえの祖父さんは、すっかり弱っている。かずかずの病で、苦しんでいるのだ。今日、わたしは祖父さんを穴埋めにするよ。というのも、あ

あなってまで生きているのは、うれしくないからね。　（dukhena phuṭṭho は、dukkhito と解する）pitāmaho tāta sudubbalo te anekavyādhīhi dukhena[12] phuṭṭho, tam ajj'ahaṃ nikhaṇissāmi sobbhe, na hi'ssa taṃ jīvitaṃ rocayāmi.（J.vol.4,p.46）

ここで、重要なことは、vyādhi が「苦しむ」（dukkhita）の原因であるようにみえるということである。そのことは、vyādhi が他の病気とは異なる独自の性質を持っていることを示している。さらに、重要な点は、b.の例では、苦の直接原因は、vyādhi ではなく roga であるとされる点である。このことは、vyādhi と roga と dukkhita との間に特定の関係があることを予想させる。

2. vyādhi と roga と dukkhita

(a) vyādhi

vyādhi には以下の特徴がある――――

① vyādhi は 、「生 jāti」「老 jiṇṇa,jarā」「死 maraṇa,mata,macca」のどれかひとつまたは二つ以上と共に出現することが多い 。原始仏教経典主要韻文では、ジャータカ以外のガーターでは、全用例がそうなっている。

（例）死と病と老いとの３者は、あたかもほむらのごとくせまって来る。これにあらがうには力がない。これを逃れるには敏速さがない。âgacchant'aggikhandhâ va maccubyâdhijarâ tayo, paccuggantuṃ balaṃ n'atthi, javo n'atthi palâyituṃ. (Thag.450)

② vyādhi は、「真実の言葉 saccavajja」によって治る病気である。また、その前後の散文によると、「医者にさじを投げられた病」であり「癩病」である。

わたしの真実が護られるならば、わたしの夫も護られるであろう。わたしは全然知りません。あなた以上にいとしいほかの人など。この真実の語によってあなたの病いが治りますように。tathā maṃ saccaṃ pāletu pālayissati ce mamaṃ yathâhaṃ nâbhijānāmi aññaṃ piyataraṃ tayā, etena saccavajjena vyādhi te vūpasammatū (J.vol.5,p.95)

③ vyādhi は「老」と同様に、人を必ず死に導くものである。

あたかも人が水上で舟を動かしそれを岸に導くように、病と老いとはつねに人間を死〔神〕の支配下に導く。 yathâpi nāvaṃ puriso dakamhi, ereti ce naṃ upaneti tīraṃ evam pi vyādhī satataṃ jarā ca, upanenti maccaṃ vasaṃ antakassa. (J.vol.4,p.478)

④ vyādhi は次の韻文の直前の散文によれば、医者が治せない病である。

わたしは vyādhi を患い、それが、roga であることによって激しく苦しめられ、悩まされている。＜以下略＞（著者訳） puṭṭhassa me aññatarena vyādhinā rogena bāḷhaṃ dukkhitassa ruppato,...（J.vol.2,p.437）

この vyādhi は、直前の散文によれば、「黄疸 paṇḍuroga」であり、医者が治せない病である。

⑤ vyādhi は roga だとされることがある。（roga のメンバーでもある。）

（上記の④と同文）

⑥ vyādhi は絶望的病気である。

おまえ、おまえの祖父さんは、すっかり弱っている。かずかずの病におかされて苦しんでいるのだ。今日、わたしは祖父さんを穴埋めにするよ。というのも、ああなってまで生きているの〔を見ること〕は、うれしくないからね。pitāmaho tāta sudubbalo te, anekavyādhīhi dukhena phuṭṭho, tam ajj'ahaṃ nikhaṇissāmi sobbhe, na hi'ssa taṃ jīvitaṃ rocayāmi. (J.vol.4,p.46)

以上を総合すると、vyādhi は、「生」「老」「死」と同じグループの概念であり、医者に見放された、癩病などの「特殊な病気」と考えられ、人を必ず死に導く不治の「病」である。また roga だとされることがある。この「病 vyādhi」は、「医療人類学」でいう「意味づけされた病」になりやすい病（症状）である。 「意味づけされた病」とは、波平恵美子氏によれば、以下のような事態である。[13]

我々が何か致命率の高い病気に罹ったと知らされた時、「なぜ自分はこのような病気になってしまったのだろうか」と考える。飲酒や喫煙や不規則な生活など、自分の過去の長年にわたる行動を振り返りそれが原因だろうかと考えたり、自分の血縁者の中に同じ病気を患った人はいないか、そうであれば、このような病気に罹りやすい体質が遺伝したのだろうかとあ

れこれと思い悩む。病状が深刻であればあるほど、また病気が稀なものであるほど、本人は「何故自分だけが」とその不運を嘆くのが常である。このような思い煩う気持ちは「病気の意味づけ」とでも呼ばれるような行為を呼び起こす。より正確に言えば、それぞれの文化が持っている「病気の意味」の中から、今の自分が納得できるようなものを捜し当てようとする行動が出てくる。「病気とは病人の、過去における誤った行動の結果である」「病人が神（あるいは祖霊）を怒らせるような罪を犯した結果、神（あるいは祖霊）が処罰として病を与えた」「（近親相姦などの）厳重なタブーとなっている行為を犯した者であることを公に知らしめるために（神あるいは祖霊が）その病気を与えた」「病人の祖先の誰かが、（殺人などの）重大な罪を犯した。その者は罪を暴かれることはなかったが、その子孫の一人が病気という形で処罰を受けている」等々の説明は「病気の意味づけ」である。伝統的な社会においてだけではなく、また過去における現象とも言えないのは、第７章で述べたように、1980年代の合衆国におけるエイズ患者をめぐっての様ざまな「意味づけ」を思い起こすだけで充分であろう。キリスト教会は「性的放縦に対して神が下した罰である」との見解を度々発表した。それほど宗教的色彩はなくても「ゲイ（男性同性愛者）の病」であるとして、誤った性行動がもたらした病気であり、病人は自分の行為の結果としてこの病気を病むことは当然だという言説は様ざまな方面から示された。このような意味づけが、エイズ流行の初期において、病気予防や患者収容、治療のための公的処置を出遅らせたと言われている。

病気は罪の表れであると同時に、罪に対して下された処罰の一つの形であるという意味づけは多くの文化に見いだされる。ただし、それはあらゆる病気に対してそのような意味が与えられるというのではない。致命率が高い、苦痛が著しい、容貌が変わるなど人が見てすぐわかるような外見上の変化をもたらす、あるいは長期にわたって病み、次第に増悪してついには死に至るといったような要素が、単独またはいくつか重なる病気には意味が与えられやすい。中世のヨーロッパ社会がその極端な例であったが、ハンセン病は多くの社会で意味づけられた病だった。それは先にあげた要

素がいくつも重なっていた故だと考えられる。病人は病気それ自身によって苦しめられるばかりではなく、与えられた意味が作り出すところの、周囲の人々の偏見や差別によっても苦しめられることになる。

vyādhi は、このように「意味づけされた病」になりやすい病気（症状）である。

（b）roga

roga は一般的には、「病気（illness, disease）」と訳されるが、以下のように、「病気」を超えた意味をも有している———

A）roga は、「病気」以外に、さまざまなメンバーを持つ。（広い外延を持つ。）

① roga は、「欲」「飢え」「老い」を含む９８種[14] がある。

昔は、欲と飢えと老いという三つの roga があっただけであった。ところが種々の家畜を祭りのために、殺したので、９８種の roga が起こった。tayo rogā pure āsuṃ : icchā, anasanañ, jarā, pasūnañ ca samārambhā aṭṭhānavuti-m-āgamuṃ. (Sn.311)

② roga のうち最大のものは、「飢え」である。

飢えは最大の病であり、形成された存在は（＝我身）は最上の苦しみである。この理をあるがままに知ったならニルヴァーナという最上の楽しみがある。jighacchāparamā rogā, saṃkhārā paramā dukhā, etaṃ ñatvā yathābhūtaṃ nibbānaṃ paramaṃ sukhaṃ. (Dhp.203)

③ roga は vyādhi をメンバーとして含む場合がある。また、苦の直接因は、roga である。

わたしは vyādhi を患い、それが、roga であることによって激しく苦しめられ、悩まされている。＜以下略＞（著者訳） puṭṭhassa me aññatarena vyādhinā, rogena bāḷhaṃ dukkhitassa ruppato, ... (J.vol.2,p.437)

B）抽象的に表現されることがある。

① roga は「無常 anicca」、「苦 dukkha」と併記される。それは、roga が、「無

常 anicca」、「苦 dukkha」、と同レベル （お互いに、一方のメンバーにはならないという意味）の概念と考えられていることを示している。

この智慧の人は　五つの欲＜の対象＞を無常、苦、roga と観察す。＜以下略＞ sa paññavā kāmaguṇe avekkhati aniccato dukkhato rogato ca,…(J.vol.5,p.148)

② roga は「苦 dukkha」と対比される。最大の roga とは、「飢え」であり、最大の dukkha とは、「形成された存在（saṃkhāra）」である。

飢えは最大の roga であり、形成された存在（saṃkhāra）は最大の苦しみ（dukkha）である。この理をあるがままに知ったならニルバーナという最上の楽しみがある。jighacchāparamā rogā, saṃkhārā paramā dukhā, etaṃ ñatvā yathābhūtaṃ nibbānaṃ paramaṃ sukhaṃ. (Dhp.203)

③ roga は、神々を超えた仏の言葉の実行によって見えてくる。

わたし、サラバンガ、は、以前には全般にわたる総括的な roga というものを見なかった。（ところが今では）神々を超えた者（ブッダ）のことばを実行することによって、（わたしは）この roga を見た。sakalaṃ samattaṃ rogaṃ Sarabhaṅgo nâddasaṃ pubbe, so'yaṃ rogo diṭṭho vacanakarenâtidevassa. (Thag.489)

ここでは、roga（の働き）は仏陀の教えによって、その本質が理解されるものである。

C. roga は輪廻思想 とその担い手であるバラモンとのつながりを持つ。

① roga はバラモンの祭式によって増える。

昔は、欲と飢えと老いという三つの roga があっただけであった。ところが種々の家畜を祭りのために、殺したので、９８種の roga が起こった。tayo rogā pure āsuṃ : icchā, anasanañ, jarā, pasūnañ ca samārambhā aṭṭhānavuti-m-āgamuṃ. (Sn.311)

roga は、バラモンが作り出したものであり、わたしたちはそれを消滅することはできない。続くガーターには、「種々の家畜を祭りのために、殺した」結果、次のようなことが起こったと記されている。

このように法が廃れたときに、隷民（シュードラ）と庶民（ヴァイシャ）との両者が分裂し、またもろもろの王族が広く分裂して仲たがいし、妻はその夫を蔑むようになった。 evaṃ dhamme viyāpanne vibhinnā suddavessikā, puthu

vibhinnā khattiyā, pati bhariyā avamaññatha. (Sn.314)

ここでは roga はヴァルナ（カースト）のようである。

② roga は、「悪い生存領域（duggati)」の言い換えとなっている。それは一種の punishment と考えられる。

人々は欲望が原因となって、悪い生存領域に到る道、自己に roga をもたらす道を大いに踏み行う。duggatigamanaṃ maggaṃ manussâ kâmahetukaṃ bahuṃ ve paṭipajjanti attano roga-m-âvahaṃ. (Thig.355)

古代インドでは、「悪い生存領域（duggati)」は、前世での悪行の結果であるとされることは、一般的である。

③ roga のうち最大のものである「飢え」（B-②）は、（バラモンたちに）施与をしないとこの世と来世で受けるものである。これも一種の punishment と考えられる。

＜神曰く＞…そのことこそ、施与をしない人にとって恐ろしいことなのである。物惜しみをする人が恐れるのは、飢え（jighacchā）と渇きであるが、この世とかの世において、それが愚人に触れる。yass-eva bhîto na dadâti maccharî, tad evâdâdato bhayaṃ, jighacchâ ca pipâsâ ca, yassa bhâyati maccharī, tam eva bâlaṃ phusati, asmiṃ loke paramhi ca. (SN.vol.1,p.18)

④ roga は、自身の行為の結果である。これも一種の punishment と考えられる。

1.苦悩を生じ、（苦の）接触に打ちひしがれた世間の人々は、「病（roga）は自己の行為（kamma「業」）の結果である」と語る。こうあれかしと念願して結果はそれと異なつたものとなるからである。（橋本訳）ayam loko santâpajâto phassapareto rogaṃ vadati attato, yena yena hi maññati tato taṃ hoti aññathâ. （Udāna,p.32）

2.生命（長寿）と健康（ārogya[15]）と美貌と、天界に生まれることと、高貴な家に生まれることと、ますます広大な喜びを追求するなら、善い果報を生じる行いに努め励むことを、賢者はほめたたえる。âyum ârogiyaṃ vaṇṇaṃ, saggam uccâkulînataṃ, ratiyo patthayantena, uḷârâ aparâparâ, appamâdam pasaṃsanti, puññakriyâsu paṇḍitâ. （SN.vol.1,p.87）

以上の用例から、roga は、「欲」「飢え」「老」、「意味づけされやすい病 vyādhi」などを含むものであり、バラモンによって作り出されたものであり、自身の行為の結果である punishment としての、不遇な輪廻的境涯における現実的不具合とでもいうべき、人間の状況を意味している。さらに、あるものを苦痛の原因にするような働き（vyādhi を「意味づけされた病」とし、苦痛の原因とするような働き）を持つものでもある。roga は、たんなる「punishment」ではなく、「バラモンによって意味づけされた、システムのようななにか」という特質も持っていると考える。また、それは、dukkha と同じレベルの「なにか」である。

（c）vyādhi と roga と dukkhita

前述の b.の例では、「苦しむ」（dukkhita）の直接原因は、vyādhi ではなく roga である。それは、このように説明できる。わたしたちは、風邪などのありふれた病気になった場合、主として身体的苦痛を感じ、精神的苦痛は、感じるとしても、激甚ということはない。しかし、その病気が、何か致命率の高い病気であると知らされた時、「『なぜ自分はこのような病気になってしまったのだろうか』と考える。飲酒や喫煙や不規則な生活など、自分の過去の長年にわたる行動を振り返りそれが原因だろうかと考えたり、自分の血縁者の中に同じ病気を患った人はいないか、そうであれば、このような病気に罹りやすい体質が遺伝したのだろうかとあれこれと思い悩む。病状が深刻であればあるほど、また病気が稀なものであるほど、本人は『何故自分だけが』と考え、さらには、『病気とは病人の、過去における誤った行動の結果である』『病人が神（あるいは祖霊）を怒らせるような罪を犯した結果、神（あるいは祖霊）が処罰として病を与えた』『（近親相姦などの）厳重なタブーとなっている行為を犯した者であることを公に知らしめるために（神あるいは祖霊が）その病気を与えた』『病人の祖先の誰かが、（殺人などの）重大な罪を犯した。その者は罪を暴かれることはなかったが、その子孫の一人が病気という形で処罰を受けている』[16]」等々と考え、激しい精神的苦痛を受ける。それと同様に、原始仏教では、人が vyādhi 以外の病になった場合、それは、「意味づけられた病」とはならない。しかし、人が vyādhi（「意味づけられた病」になりやす

い病）を患った場合、そしてそれが、roga（「バラモンによって意味づけされた病」）であるとされた場合に初めて、患者は、「前世での悪行の結果ではないか」「（バラモンたちに）施与をしなかったからではないか」などと考え、激しい精神的苦（dukkhita）を感じる。言い換えれば、病気による激しい精神的苦（dukkhita）は、roga というシステムを通して生じるのである[17]。

3. dukkhita と dukkha

以上のごとく、dukkhita と vyādhi と roga の関係は明らかになった。しかし dukkhit と dukkha は同じではない。dukkhita は dukkhāpeti の過去分詞であり、通常「苦しむ」「苦しい」と訳される。dukkha は形容詞でもあり中性の名詞でもある。形容詞の場合は、dukkhita とほぼ同義である。しかし、中性名詞の場合、それは、仏教の中心概念でありながら、経典中で定義されることのない中心概念である。dukkha と vyādhi と roga の関係はどうであろうか。

4.「病」と dukkha と roga

「病」と dukkha との関係を論ずる場合、「４の尊い真理（四聖諦）」は重要である。なぜなら、「４の尊い真理（四聖諦）」は、インド３大古典医学書のひとつである「『チャラカ・サンヒター』で前提された古代インド医学の一般的立場[18]」とされるものと酷似しているからである――

すなわち、原因があり、病があり、治癒しうる病を治療する方法がある。

yathā santi nidānani, santi vyādhayaḥ; santi siddhi-upāyāḥ; santi siddhi-upāyāḥ sādhyānām [19].

ここでは、「病」は vyādhi であらわされ[20]、「苦諦」が「病気があり」に、「集諦」が「原因があり」に、「滅諦」が「治癒しうる病気」に、「道諦」が「治療する方法」に相当する。

さて、「４の尊い真理（四聖諦）」における dukkha の特徴は何か。『ダンマ・パダ』での例を見てみると――

悟れるものと真理のことわりと聖者の集いとに帰依する人は、ただしい知恵をもって４の尊い真理を見る――すなわち苦しみと、苦しみの成り立ちと、苦しみの超克と、苦しみの終滅に至る８の尊い道とを見る。yo ca Buddhañ ca Dhammañ ca Saṃghañ ca saraṇaṃ gato cattāri ariyasaccāni sammapaññāya passati, dukkhaṃ dukkhasamuppādaṃ dukkhassa ca atikkamaṃ ariyañ c'aṭṭhaṅgikaṃ maggaṃ dukkūpasamagāminaṃ.（Dhp.190～191）

この dukkha は、わたしたち自身の妄執や悪い行いから生じる[21] 。そして、ここに見られるようにわたしたち自身による８つの実践によって消滅させることができるものである。すなわち、dukkha の生・滅は、私たち自身の行為に基づいている。

すでに述べたとおり、dukkha と roga は、峻別されている面もあるが、以下の点で似ている。そのことは、「roga と dukkha」(『印度学仏教学研究』第 56 巻第 1 号平成 19 年）で述べたので、ここでは、簡単に記載しておく――

1. 「欲楽・愛欲」(kāma)は dukkha であり、かつ roga である。
2. kāma は dukkha と roga の原因である。
3.「身体」(bimba,kāya)は「roga の巣」であり「dukkha の群がるところ」である
4. kāmaguṇa は dukkha であり、かつ roga である。

また、roga と dukkha が同レベルの概念であることについては[22]、すでに述べた。さらに、重要な類似点は、roga でも「四聖諦」をつくることができるという点である。

A「苦諦」に相当する「roga が存在する 」という事実――

昔は、欲と飢えと老いという三つの病があっただけであった。（Sn.311 の前半）tayo rogā pure āsuṃ : icchā, anasanañ, jarā,

B「集諦」に相当する「roga の原因」――

1.ところが種々の家畜を（祭りのために）殺したので、９８種の病（roga）が起こった。pasūnañ ca samārambhā aṭṭhānavuti-m-āgamuṃ. （Sn.311 の後半）

2.この世間の人々は、感官による外界との接触に負け、苦悩に陥り、「病（roga）は自己の行為（kamma「業」）の結果である」と語る。こうあれか

しと念願して結果はそれと異なつたものとなるからである。ayam loko santâpajâto phassapareto rogaṃ vadati attato,　yena yena hi maññati tato taṃ hoti aññathâ.　（Udāna.p.32）

C「滅諦」に相当するのは「roga の消滅した状態が可能である」という事実であるが、それは、次の偈など で aroga/ārogya（健康・無病、ここではニルヴァーナに比せられる）という言葉があることより確認される――

無病（ārogya）は最高の利得であり、満足は最上の宝であり、信頼は最高の知己であり、ニルヴァーナは最上の楽しみである。ārogyaparamā lābhā, santuṭṭhiparamaṃ dhanaṃ, vissāsaparamā ñātī, nibbānaṃ paramaṃ sukhaṃ.（Dhp.204）

D「道諦」に相当するものは、「善い果報を生じる行いに努め励む」ことである――

生命（長寿）と健康（ārogya）と美貌と、天界に生まれることと、高貴な家に生まれることと、ますます広大な喜びを追求するなら、善い果報を生じる行いに努め励むことを、賢者はほめたたえる。âyum ârogiyaṃ vaṇṇaṃ, saggam uccâkulînataṃ, ratiyo patthayantena, uḷârâ aparâparâ, appamâdam pasaṃsanti, puññakriyâsu paṇḍitâ.　（SN.vol.1,p.87）

以上の点で、roga は dukkha に似ている。roga が、「（バラモンによって）意味づけされたなにか」「意味付けするシステム[23]」であることから、dukkha にもそのような、「（仏教によって）意味づけされたなにか」「意味付けするシステム」という意味があるのではないかと考える。言い換えると、roga は、バラモン版「意味付けするシステム」、dukkha は仏教版「意味付けするシステム」なのではないかと考える。

また、この両者には、ある構造がある。それは、次のガーターから明らかとなる―――

飢えは最大の roga であり、形成された存在（saṃkhāra）は最大の苦しみ（dukkha）である。この理をあるがままに知ったならニルヴァーナという最上の楽しみがある。jighacchāparamā rogā, saṃkhārā paramā dukhā, etaṃ ñatvā yathābhūtaṃ nibbānaṃ paramaṃ sukhaṃ. (Dhp.203)

ここでは、roga と dukkha とのあいだには、ある構造がある。それは、「飢え」と roga との関係は、「形成された存在（saṃkhāra）」と dukkha の関係に等しいという構造とともに、dukkha と roga は、正反対の性質を持っているという構造である。注釈書[24]によれば、「飢え」が最大の roga であることの理由は、「飢え」以外の病気は、治療などによって消滅する、すなわち、それらは、一時的なものだが、「飢え」は、永続的に手当しなければならないということである。つまり、roga には、「永続性」という本質的性質があり、その最たるものが、「飢え」ということである。ということは、その正反対である、dukkha には、「非永続性」という本質的性質があり、その最たるものが、「形成された存在（saṃkhāra）」ということとなる。

ここまでの roga と dukkha をまとめると――
roga には以下の特徴がある。
1. roga は、dukkhita を生むシステムである。
2. roga だとされるものは、自己の行為の結果であり、punishment である。
3. roga だとされるものは、バラモンの祭式から生じる。
4. roga だとされるものは、自己の行為によってなくすことはできない。バラモンの祭式によって人は、roga の一つを選ぶのである。
5. roga だとされるものは、永続性を持つ。
一方 dukkha には以下の特徴がある。
1. dukkha は、vyādhi の消滅、すなわち roga の消滅を生むシステムである。
2. dukkha だとされるものは、自己の行為の結果であるが、punishment ではない。
3. dukkha だとされるものは、仏陀によって宣言される。
4. dukkha だとされるものは、自己の行為によってなくすことができる。
5. dukkha だとされるものは、一時的なものである。

roga から dukkhita が生じるメカニズムはすでに述べた。それは、vyādhi が roga であるとすることから説明された。それでは、vyādhi が dukkha であると判

断することからは何が生じるのであろうか。それは、vyādhi が dukkha であるとした場合に働くメカニズムが何かということである。それは、「四聖諦」の表現を援用すればこうである――

1　vyādhi は dukkha である（roga ではない）と宣言する。
2　dukkha である vyādhi は自身の行為から生じる。
3　dukkha である vyādhi は消滅させることができる。
4　dukkha である vyādhi は自身の８種の実践（八正道）で消滅する。

このメカニズムによれば、vyādhi を dukkha であると判断した場合、「vyādhi の消滅」が期待されるのである。

5. 結論

わたしたちの患っている vyādhi が roga とされた場合、dukkhita が生じ、バラモンの力を借りない限り永遠にその苦はなくならない。しかし、おなじ vyādhi が仏陀によって、dukkha だと宣言された場合、その vyādhi はわたしたちの努力で必ず治癒されると言われたのと同じである。それは、病むものに、必ず治癒されるという希望を与えることである。dukkha は、「希望の徴（しるし）」である。

dukkha を「病」というフィールドに限って扱った場合、以上のような結論に至った。「病」以外のフィールドを対象とした場合、どのような結果が出るかは未分明である。しかし、roga とされた「病」（vyādhi[25]）のみを「苦」（dukkhita）であるとすることに対するこれが最も合理的な説明であると考える。

END

＜キーワード：dukkha,　roga,　インド仏教医学、原始仏教、「病」、「苦」＞

---

[1] 『スッタニパータ』、『ダンマパダ』、『サンユッタ・ニカーヤ（相応部）』第１巻、『テーラガーター』、『テーリー・ガーター』、『イティブッタカ』、『ウダーナ』、『ジャータカ』内のガーター。およそ 11,700 ガーター。パーリ語文はすべて PTS 本(Dhammapada1995, Itivuttaka 1975,　Saṃyutta-Nikāya vol.I 1973, Suttanipāta1965,　Thera- and Therīgāthā 1966,　Udāna1948, Jātaka1962-1966.)から。訳文は特に断りがない場合は、以下のものを参考にした――　Theragāthā：中村元訳『仏弟子の告白』1989 岩波文庫、早島鏡正訳『原始仏典　第９巻―仏弟子の詩―』昭和６０年講談社、 Therīgāthā：中村元訳『尼僧の告白』2001 岩波文庫、早島鏡正訳『原始仏典　第９巻―仏弟子の詩―』昭和６０年講談社、Suttanipāta：中村元訳 『ブッダのことば』1991 岩波文庫、渡辺照宏訳『世界の大思想 II-2 仏典』昭和 44 年河出書房新社、村上真完・及川真介訳『仏の言葉註―パラマッタ・ジョーティカー―』春秋社、Dhammapada: 中村元訳『ブッダの真理のこと

ば感興のことば』1978 岩波文庫、藤田宏達訳『原始仏典 第 7 巻―ブッダの詩 I―』昭和 61 年講談社、SN.vol.1:中村元訳『ブッダ神々との対話』『ブッダ悪魔との対話』1986 岩波文庫、Udāna:桜部建・渡辺愛子訳『原始仏典 第 8 巻―ブッダの詩 II―』昭和 60 年講談社、Itivuttaka:長崎法潤・渡辺顕信訳『原始仏典 第 8 巻―ブッダの詩 II―』昭和 60 年講談社。

[2] 散文の仏典では、仏陀は「四聖諦」という薬を処方する医師にたとえられている。（*The Milindapañho：beingdialogues between King Milindānd the Buddhist sage Nāgasena*, The Pāli text edited by V. Trenckner, London, 1880,p.334-335.）邦訳：『ミリンダ王の問い―インドとギリシャの対決』（中村元・早島鏡正訳、平凡社　東洋文庫 7,15,28、昭和３８年～３９年）。

[3] ここでの医術とは、アタルヴァ・ヴェーダの「医術」と考えられる。また、ある弟子は、他の弟子達が医師としてふるまうことを非難している----医薬に関しては医師のように、為すべきことと為すべからざることに関しては在家者のように、粧い飾ることに関しては遊女のように、権威に関しては王族のように〔ふるまう。bhesajjesu yathā vejjā, kiccākicce yathā gihī, gaṇikā va vibhūsāyaṃ, issare khattiyā yathā〕(Thag.939)

[4] 結論を先取りしていえば、彼には彼独自の「病」の概念があり、それに対応する「医療行為」があった。すなわち、アタルヴァ・ヴェーダ的「医術」は否定したが、それとは別の「医術」は肯定した。

[5] 本稿では、医療人類学などで行われる illness,disease,sickness 相互の区別をせず、それらをすべて「病」であらわしている。

[6] dukkhita は、dukkha の派生語。ins.であらわされる病名とともに使われる場合は、「～を患う」と訳すことも可能であるが、その場合も、「苦しむ」という意味が、含意されていると考える。PTSD.の記事
――Dukkhita (adj.) [Sk. duḥkhita; pp. of *dukkhāpeti] afflicted, dejected, unhappy, grieved, disappointed; miserable, suffering, ailing (opp. sukhita) D i.72 (puriso ābādhiko d. bāḷha -- gilāno); ii.24; S i.149; iii.11=iv.180 (sukhitesu sukhito dukkhitesu dukkhito); v.211; M i.88; ii.66; Vin iv.291; Sn 984, 986; J iv.452; Miln 275; DhA ii.28; VvA 67.

[7] 「愚人と共に住むこと」（Dhp.207）、「婦女の身であること」（Thig.216）、「愛する人にあわない・・・愛しない人とあう」（Dhp.21.）、「愛するものとの絆」（Thag.737）、「他人に従うこと」（Udāna,2.9）、「好ましく愛すべく心にかなうものが滅びる場合」（Sn.759）、「様々な人々から受けいれられること」（Thag.1051）、「悪い行為が積み重なること」（Dhp.117）、「怒りを含んだ言葉」（Dhp.133）、「地獄」（Sn.678）、「畜生」（Thag.258）、「（灼熱した鉄丸で）焼かれるとき」（Dhp.371）、「勝負に敗れること」（Dhp.201,SN.vol.1,p.83）、「我が子が思い通りにならない（アニカラッタ王と結婚しない）こと」（Thig.484,Thig.461）、「娘の離縁」（Thig.419）、「他人に呪われること」（Sn.984,Sn.986）、「牢獄に長くとどまって苦しみにさいなまれている」（j_1_021_g_0138）、「羅刹に食われる」（j_5_094_g_0294）、「身体の内も、また外もいつも焼かれる」（j_5_268_g_0106）、「母さんに会えなくなる」（j_6_080_g_0309）。

[8] byādhi と書かれる場合もある。vyādhi は、一般的には、「病気」と訳されるが、それ以上の意味を含んでいることが確実なので、本稿では、あえて訳語を使わない。

[9] J.vol.6,p.318 の ātura（皮膚病の一種）もその病気が、roga だとされる場合は、dukkhūpanīto すなわち、dukkhita であるとみなすこともできるが、それは、稿を改めて論じたい。

[10] 散文によれば、「黄疸 paṇḍuroga」を意味している。また、別の箇所 では、vyādhi は、「癩病」とされる。

[11] 「vyādhi を患い、roga であることによって」は「roga である vyādhi によって」とも訳しうるが、今は、vyādhi と roga との対比を明瞭にするためこのように訳す。roga は、一般的には、「病気」と訳されるが、それ以上の意味を含んでいることが確実なので、本稿では、あえて訳語を使わない。

[12] ＝dukkhena。

[13] 波平恵美子『病と死の文化――現代医療の人類学』（朝日選書 1990）254～256 ページ。いわゆる「スティグマ」といえるとも思うが、どうか。

[14] 注釈書（Pj.1,p.324）によれば、眼病(cakkhuroga)をはじめとする９８種の病気。Pali-English Dic.(PTS)の ‘roga’の項に「98 種」についての記述があるが、「98 種」の全てが判っているわけではない。

[15] roga の否定の形容詞。

[16] 波平恵美子『病と死の文化――現代医療の人類学』（朝日選書 1990）254～255 ページ

[17] a.と c.の用例は、このような構造の縮約版であると考える。dukhena phuṭṭho は dukkhito と書き換えられる。

[18] D. チャット・パーディヤーヤ著、佐藤任訳『古代インドの科学と社会』（同朋社　昭和 60 年）26 ページ。同所で　、それは「すべての医学派が、一致して分担すべき定説（sarva-tantra-siddhānta)」とも言われる。（Debiprasad Chattopadhaya *Science and Society in Ancient India*, Research India Publications, Culcutta, 1979, p.22）

[19] Caraka-saṃhitā, iii 8 37.

[20] ここでは、医師の扱う病は、vyādhi である。

[21] 一方、dukkhita は他者の呪いの言葉（Sn.984）、他者の行動（娘が結婚しないこと Thig.461,484）などによって生じ、教師（J.vol.1,p.5,G）、良薬（J.vol.5,p.499,G）、水（J.vol.3,p.508,G）、大臣の知恵（J.vol.6,p.508,G）などによって消滅する。すなわち、dukkhita の生・滅は、他者の行為に基づいているのである。さらに、dukkha は roga から生じないが、dukkhita は roga から生じるという相違がある。

[22] 「roga と dukkha」（『印度学仏教学研究』第 56 巻第 1 号平成 19 年）参照。

[23] 行動様式の束としての「文化」とも言いうる。そのような意味では、roga も dukkha も loka の一種かもしれない。

[24] *Dhammapadatthakathā* vol.III (PTS.1970),　p.263-264.

[25] J.vol.6,p.318 の ātura（皮膚病の一種）もその病気が、roga だとされる場合は、dukkhūpanīto すなわち、dukkhita であるとみなすこともできるが、それは、稿を改めて論じたい。